

SINMEIKAI

新明解

第2版

日本語  
アクセント  
辞典

CD  
付き

金田一春彦  
...[監修]

秋永一枝  
...[編]

## 目次

序 ……3

この辞書を使う人のために ……7

解説 ……16

ア…… 1	イ…… 32	ウ…… 68	エ…… 87	オ…… 98
カ……135	キ……196	ク……237	ケ……259	コ……280
サ……326	シ……357	ス……448	セ……469	ソ……495
タ……514	チ……552	ツ……573	テ……588	ト……610
ナ……647	ニ……668	ヌ……683	ネ……686	ノ……693
ハ……702	ヒ……744	フ……774	ヘ……809	ホ……820
マ……844	ミ……863	ム……880	メ……889	モ……898
ヤ……911		ユ……925		ヨ……936
ラ……953	リ……958	ル……970	レ……972	ロ……978
ワ……986				ヲ……994
ン……994				

付録 ……(1)～(125)

東京アクセントの法則について 音韻とアクセントとの関係の法則

東京アクセントの習得法則

資料 結合名詞の後部 一覧

あとがき ……(126)～(128)

監修者・編者紹介 ……(129)

---

本文イラスト

脇田悦朗

地図製作

ジェイ・マップ

装画

安田みつえ

装丁

三省堂デザイン室

組版

株式会社アイワード

©Sanseido Co., Ltd. 2014 Printed in Japan

---

## 序

二十一世紀の始まる年に『新明解日本語アクセント辞典』を世に出した。それは、いわば二十世紀末までのアクセントを記録したものだ。その後、十余年の間に、インターネットの普及をはじめ日本語を取り巻く環境は大きく変わった。その中で日々新たな言葉が生まれ、アクセントにも新しい傾向がみられるようになった。

今回の第2版に向けての改訂作業も、この間の日本語の変化に単純に従うのではなく、これまで序文や解説で記してきた記述の方針によって進めた。新収録の言葉を選ぶに際しては、これまで収録することができなかったものや、新たに幅広い世代で日常的に使われるようになった言葉を中心に選ぶようにした。また、東京近郊の地名などの固有名詞や、読者の方々からお問い合わせが多かった言葉も加えた。そして、新しい傾向として一定の定着をみたと考えられるアクセントについては、それを追記した。あわせて《新は》《古は》《強は》といったアクセントの移り変わりについての注記も、時代を考慮し一部を改めた。その結果、収録語数は約1,600語増え、約76,600語となった。

さらに、この間のアクセント研究の進展や、読者の方々からのご質問を踏まえ、「解説」と「アクセント習得法則」も見直した。基本的な考え方は変えていないが、理解の助けとなるよう説明の仕方を一部改め、資料も増やした。

こうして、日本語の変化を取り込みつつ新たな版となったこの辞典だが、この間の最大の変化は、五十年にわたって辞典作りを導き、この序文を書き続けてくださっていた金田一春彦先生を2004（平成16）年に失ったことである。今回も、収録語の収集・アクセント調査は秋永が中心に行ったが、金田一先生が支えてくださった考え方は変えずに作業を進めたことから、引き続き監修者としてお名前を挙げさせていただくこととした。

この辞典が、これまで以上に読者の方々に広くご活用いただき、その中でお気づきになったことをお寄せいただけるならば、この上ない喜びである。

2014（平成26）年1月15日

秋永一枝

## 『新明解日本語アクセント辞典』初版の序

私は、昭和三十三年に『明解日本語アクセント辞典』の序文を書いたが、今その本の三訂版にあたる序を書きながら、アクセントに対する考え方が、昔と今とで随分違っているのに気づいて驚く。

初版の序文を書いた頃は、見返しの地図に記したアクセントの区別のない地域の小学校の子供に、「箸」と「橋」、「雨」と「飴」の区別を尋ねても、全く答えてはくれなかった。その後注意してみると、アクセントの区別のない地域にも東京アクセントをかなり自由に使いこなせる人がおり、現在ではそういう若い人たちが次第に多くなりつつあることを知った。これは、テレビ・ラジオの普及によるところが大きいに違いない。とすると、そのような地域の人にとっても標準アクセントの辞典は必要であることがわかった。それならば、標準アクセントの法則などは大いに有効であろうと思い、今度の版では編者の秋永君に標準アクセントの法則の欄を、より詳しいものにしてもらった。勿論、アクセントの区別のある方たちが、標準アクセントをマスターする際にも、大いに役立つものと思う。

今回、再訂版よりも更に収録語数を増やし、本文のみで約7万5000語とした。この中には新語や固有名詞もかなり含まれている。また、若い人たちの使うアクセントも大幅に取り入れてあり、私どもの年代では全く使わないような外来語の平板型も、『新は』として記載してある。同時に、高年層の使用する古めかしいアクセントも、『古は』『もとは』として記してあり、その点一般の読者ばかりでなく研究者にも利用されるに違いない。

この辞典の語彙の収集・アクセントの調査は、初版、第二版と同じく、秋永一枝君が全面的にその任にあたった。永年、早稲田大学文学部の教授を勤めた秋永個人の著書とお考えいただきたい。

今回は、『新明解日本語アクセント辞典』と書名を改めたが、私どもの基本とする考え方は、初版、第二版の序に記したとおりでである。新しい世紀に向けてこのようなアクセント辞典を世に送ることができるのは真に喜ばしい。読者の方がたが、それぞれの年代に応じて本書を利用してくださることを望んでやまない。

終りにあたり、本書の成るについて協力を惜しまれなかった多くの方がたに感謝の意を表する。

平成十三年一月十五日

金田一春彦

## 『明解日本語アクセント辞典』第二版の序

この辞典も、初版を世に送ってから二十二年余りになる。暖かく迎えて下さった御愛用の各位には慎んで御礼申し上げます。二十二年も経るうちには、日常使っている日本語の語彙も出入りし、中にはアクセントそのものが変化したものもある。ここに採録語数をふやし、第二版をお届けする次第である。

日本語のアクセント辞典としては、これとは別にNHKの『日本語発音アクセント辞典』というものがある。一つあればいいではないか、それに辞典によって単語のアクセントがちがうものがある、それはどうしたのだ、という声が聞える。が、そういうものではない。アクセント採録の目的にちょっとしたちがいがいがあるのだ。